



四万十町

町内「ぶら〜」散策

# 葛籠川

つづら がわ

戦国末期にはすでに、津々羅川(葛籠川)とトトロサキ(轟崎)が田野々村の中に含まれて記載されていると、前号にも書いた。今号は葛籠川である。

道の駅・大正、轟公園がある交差点から国道439号へ。少し行ったところを右折して、葛籠川沿いを一の又溪谷方面へ向かい、しばらく走ると葛籠川の集落に入る。地区は中村との境界までまだまだ続く。国道439号に沿ったルートも含めて、曲がりくねった、まさに「葛折り(九十九折り)」の山道に沿って人家が点在している。

葛籠川という名の由来は「葛折り」の語源とも言われる、葛籠の材料となるツツラフジの曲がりくねった蔓のような地形からきているのであろうとされているのであるが、この地区で暮らして80年以上になる方によると、昔々、山奥でひっそり生き延びていた平家の落人の着物の切れ端(「つづれ」)が、現在の葛籠川最下流である四万十川との合流地点に流れ着いていたことから、つづら川との名がついたという言い伝えがあるのだそうだ。

一の又トンネルの手前に、地区の産土神である河内神社がある。昔はトンネル入り口に向かって右側の谷を少し行っただころにあったのだという。現在の場所には小学校(田野々尋常小学校葛籠川分教場)があった。後にこの分教場は、集会所横に移転した。また、境内の奥には茶堂が建てられている。これは地区にあった二つの茶堂をまとめたもので、祭壇も真ん中で二つに区切られている。さらに、社の正面に数本の榎が円を描くように植えられているのであるが、これは「お伊勢踊り」が行われていた跡であるという。

さて、先述の地区の方が「太平洋戦争真っ只中の子ども時代」の貴重なお話を語ってくれた。山間の集落から出ることなど滅多にない当時の子どもたち

戦国末期にはすでに、津々羅川(葛籠川)とトトロサキ(轟崎)が田野々村の中に含まれて記載されていると、前号にも書いた。今号は葛籠川である。

道の駅・大正、轟公園がある交差点から国道439号へ。少し行ったところを右折して、葛籠川沿いを一の又溪谷方面へ向かい、しばらく走ると葛籠川の集落に入る。地区は中村との境界までまだまだ続く。国道439号に沿ったルートも含めて、曲がりくねった、まさに「葛折り(九十九折り)」の山道に沿って人家が点在している。

葛籠川という名の由来は「葛折り」の語源とも言われる、葛籠の材料となるツツラフジの曲がりくねった蔓のような地形からきているのであろうとされているのであるが、この地区で暮らして80年以上になる方によると、昔々、山奥でひっそり生き延びていた平家の落人の着物の切れ端(「つづれ」)が、現在の葛籠川最下流である四万十川との合流地点に流れ着いていたことから、つづら川との名がついたという言い伝えがあるのだそうだ。

一の又トンネルの手前に、地区の産土神である河内神社がある。昔はトンネル入り口に向かって右側の谷を少し行っただころにあったのだという。現在の場所には小学校(田野々尋常小学校葛籠川分教場)があった。後にこの分教場は、集会所横に移転した。また、境内の奥には茶堂が建てられている。これは地区にあった二つの茶堂をまとめたもので、祭壇も真ん中で二つに区切られている。さらに、社の正面に数本の榎が円を描くように植えられているのであるが、これは「お伊勢踊り」が行われていた跡であるという。

さて、先述の地区の方が「太平洋戦争真っ只中の子ども時代」の貴重なお話を語ってくれた。山間の集落から出ることなど滅多にない当時の子どもたち

葛籠川は、お祭りや学校行事などで田野々に行くことがあると、みんな胸が躍ったのだそうだ。ある日のこと、1年生から6年生までの全校生徒が学校行事で田野々に行った。行事が済んで帰途についたのだが、1年生の女の子ひとりが見あたらないことが判明。村中が大騒ぎになった。当時、村人たちは空襲警戒の出役として、田野々にある「監視所」に詰めていて、そこにもすぐに連絡が入った。大人たちはそれはそれは探し回ったという。雨も降ってきた。あたりが暗くなりかけ、いよいよ心配が募り切った頃、遠く下津井の旅館から「無事保護」の一報が入る。聞けば、彼女は、みんなとはぐれてしまい「おうちにかえらねば!」と思って、川の上流に向かってがんばって歩いたのだという。川沿いを上って歩けば「つづら川のおうちにかえることができる!」そう思うて一生懸命歩いたのだという。なんと健気なことか。下津井の人もよくぞ見つけてくれたものである。80年以上前のことであるが、当時の人々の体温が伝わる。

葛籠川の集落には、その山深き故に人々の畏怖もあって、たくさんのお話や民話が残されている。どれをとってもたいへん貴重なものであるが、この少女の愛おしい心と姿と、その小さき命を思った村人たちの奮闘も、後世に残していきたい温かい実話である。そんな葛籠川である。

葛籠川は、お祭りや学校行事などで田野々に行くことがあると、みんな胸が躍ったのだそうだ。ある日のこと、1年生から6年生までの全校生徒が学校行事で田野々に行った。行事が済んで帰途についたのだが、1年生の女の子ひとりが見あたらないことが判明。村中が大騒ぎになった。当時、村人たちは空襲警戒の出役として、田野々にある「監視所」に詰めていて、そこにもすぐに連絡が入った。大人たちはそれはそれは探し回ったという。雨も降ってきた。あたりが暗くなりかけ、いよいよ心配が募り切った頃、遠く下津井の旅館から「無事保護」の一報が入る。聞けば、彼女は、みんなとはぐれてしまい「おうちにかえらねば!」と思って、川の上流に向かってがんばって歩いたのだという。川沿いを上って歩けば「つづら川のおうちにかえることができる!」そう思うて一生懸命歩いたのだという。なんと健気なことか。下津井の人もよくぞ見つけてくれたものである。80年以上前のことであるが、当時の人々の体温が伝わる。

葛籠川の集落には、その山深き故に人々の畏怖もあって、たくさんのお話や民話が残されている。どれをとってもたいへん貴重なものであるが、この少女の愛おしい心と姿と、その小さき命を思った村人たちの奮闘も、後世に残していきたい温かい実話である。そんな葛籠川である。



河内神社の境内。ここに分教場があった。

※先月号の集落名を「田野々・轟崎」と表記していましたが、「轟崎」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

		適正值(mg/l)				4月8日	
町のうごき	(3月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
	男	7,608	- 53	男	3	17	40
	女	8,325	- 55	女	2	24	33
	計	15,933	- 108	計	5	41	73
	世帯数	8,180	- 24	(3月中の届出)			
		窪川地域	11,307人	大正地域	2,207人	十和地域	2,419人
				四万十川の 水質状況			
				リン酸		≤ 1.0	測定範囲以下
				硝酸		≤ 0.5	0.391
				アンモニウム		≤ 5.0	測定範囲以下
				アニオン活性剤		≤ 1.0	測定範囲以下
				化学的酸素要求量		≤ 10.0	測定範囲以下
				調査：大正(吾川)			
				資料：四万十高校自然環境部			